

令和6年8月26日

横浜市小学校社会科研究会

3 学年部会

研修会記録

第3号

横浜市小学校教育研究会
会長 沼田 留美子
横浜市小学校社会科研究会
会長 高畠 聡
同 学年部長 栗田 一輝

【提案日時】

8月 1日 (木)

提案 諸橋 奈苗 先生 (日吉南小)

【会 場】

フォーラム南太田

司会 寺沢 琢郎 先生 (西本郷小)

記録 正川 愛海 先生 (鶴見小)

1 提案内容

店ではたらく人と仕事～魚売り場にある呼び出しボタンのひみつ～

2 提案者より (○成果 ●課題)

子どもたちと授業を作っていく意識をもった単元づくりを行った。

視点①

子どもが自ら問いをもてるように、数値化したものを可視化して分かりやすくしたり、動画やボタンのシミュレーションといった具体物の掲示を行ったりした。また、単元の中でスーパーマーケットに2回見学に行くことで、深く追究できるようにした。授業の中では、児童の発言に対する問い返しを意識して行った。

○スーパーマーケット1回目の見学で疑問に思ったことを2回目で解決できるようにしたことで、追究していく姿を見ることができた。

●見学を2回するうえで、グループで話し合ったことで深まった子もいれば、つながった思考にならなかった児童もいた。さらなる問いをうむことが難しい児童への手立てが必要だった。

視点②

見学後の振り返りは子どもたち同士で意見を出し合えるようにグループで行った。教師側は座席表を活用し、子どもたちの考えを見とった。

○グループ内で共有することで自分では気づくことができなかった新しい発見をすることができた。

○魚売り場のボタンに注目し、何をしてくれるか、どんな人がボタンを押すのか、という二つの視点で話し合うことでどうして便利なのに0円なのか、という本気の学習問題が生まれた。

●さまざまなサービスを0円で行う→お客さんにとって便利→お客さんが増えるという流れを理解してほしかった。⇒嬉しい、優しいなどの感情の言葉で終わってしまった児童がいた。

●かご、ビニール袋、駐車場は無料で貸し出しなどサービスの捉え、基準の曖昧さがあった。

3 協議会

視点①単元の流れについて (特に見学後の共有) ○成果 ●課題

○具体物や動画があると分かりやすい。

○呼び出しボタンに注目している点が良い。

○お店側は、お客さんのことを一番考えているということに気がついている。

●経験をもとにして進めていければ便利さについて実感がわく。

●定義づけが大事。サービスとは何か。同じ土俵で話し合えることが大事。

- 実際に捌いている人にフォーカスしたり、実際にボタンを使う人にインタビューしたりできたらよい。
- 「お客さんを集めるために具体的にどんなことをしている？」と子どもに投げてもよかった。これを受けて再度見学に行く。話し合ったり体験したりして変わった意見があってもよい。
- 2回目の見学が子供たちの中の必要感があったのか。視点・焦点を合わせた状態で行けたらよかったのでは。→他のグループとの情報の共有「こちらのグループの疑問が解決できていないから、これを見に行こう」という目的の共有があってもよかった。

視点②本時 第3分節以降について

○問い返しについて

別のお店の例を上げたり、1人の発言から広げて行ったりすることができるよ。

「売上」の視点をもたせるためには誰のためのサービスなのかを共有し、売上という言葉が授業のはじめから出しておく。問い返しの際に「1000円、500円で捌いていたらどうなるか？」など、無償と有償の違いが出ていれば「売上」につながるという話が出たのでは。「売上を良くするため」という発言に対して、「どうということ」と問い返すとよかった。実感を想像し始められるような問いかけをすることで深い学習問題が出てくる。

○立場よっての視点について

客側の視点とお店側の視点で分けて考える必要があるのではないかと。一緒に考えられてしまっているため、「便利」という言葉の定義があいまいになってしまっている。

実際に魚を捌いている人に話を聞くことでリアルな思考にしていけるのではないかと。

→なぜ頼んでくる人が少なくても続けているのか、0円なのかというような話も聞けると、事実として提示できる。

<講師の先生より> 平沼小学校 校長 寺岡 徹先生

身近な材であったことはとてもよかった。自分なりによく考えた発言が多く、互いの話をよく聞いている様子があった。具体的な数値が現れており、子どもが追究するチャンスがあった。先生の見とりが丁寧で、子どもたちが何を考えているか把握しており、授業をコントロールすることができている。また、板書計画をたて、整理をして、しっかり記録されている。

個をいかに、協働的な学びをしたいところだが、3年生が自分たちで問いを生んでいくのはなかなか難しい。協働的な学びになるためには一人ひとりが学んでいること、問題が共有されていること、切実感があることが大事。

単元を見通す学習問題について

「お客さんのためにどんなくふうをしているのかな」という単元を見通す学習問題について、子どもたちは考えていたが、教師が本時でそれを求めていなかった。

ボタンを押して魚をさばくことが0円という話は、子どもたちにとって切実に考えたいことだったのか。魚を0円でさばいてもらえるという便利さが子どもたちに近かったかということも含め、あまり切実感がなかったのではないかと。

0円にしているものは他にあったかということが、気になっている子どもたちに対して「どうして0円なのか」ということについてのお店の人の話を出してもよかった。

→「そうなんだ」という反応で一度その話が落ち着くのではないかと。

0円とサービスの違い

0円であることをベースで話を進めるとサービスとの違いが分かりづらくなる。それがあまり可視化しきれいでなかった。サービスは「ニーズに合わせて人が介在しているもの」ということを共通の認識にすると、ピニールなどは出てこなかった。どのような違いがあるかを示すとよい。

<講師の先生より> 玉川大学教職大学院 教授 梅田 比奈子先生

「問い返し」について

3年生は難しいことはわからない。「どうして？」をもっと聞く。抽象的な言葉だけで、具体的な事実がないと問題意識が低くなってしまふ。問い返しをして、問題意識をはっきりさせていくことかせ必要。「便利っというけど本当に便利なのか」など、裏にある事実をたくさん拾い、何をさせるか教員が持っておくことが大切。

子どもたちの考えが「本当にそうなのか」、インタビューなどを通して事実を確認する必要がある。子どもが自分から「本当なのか」という疑問を持ち、動き出す子どもたちをつくりたい。→自分から聞きに行ったり、見に行ったり実際に行動することで自信をもって子どもたちが発言していく。

店側と客側の視点のちがひ

「買いに来る人」と「スーパー」のそれぞれにとってどんなメリットがあるのか、を分けて聞くとよかったです。

スーパーに人が集まる理由は、スーパーがやっていることだけが理由とは限らない。「見つけたことは本当に人を集めるためにしていることなの」と問い返すと、違った工夫が見えてくるのではないかと。

個別最適な学び

個の学びを確立するには、それぞれの子ども背景や考えていること、興味があることを見とる必要がある。

誰と誰を話合わせるかをよく考えながら授業づくりをしていかないと、共通の問題としての話し合いが生まれなくなる。同じ学習をしている子どもたちの中にも、「いいと思う」人と「どうでもいいと思う」人がいる。色々な価値観、見方、考え方があるということを出し合う事が大切。自分には関係ないことでも「大事だ」と思っていることがそれぞれにあるということを知る事が大切。

文責 正川 愛海 (鶴見小学校)